俺と紗耶香と世界！！

宮原葉月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺と紗耶香と世界！！

【Ｎコード】
Ｎ３１０７Ｍ

【作者名】
宮原葉月

【あらすじ】
俺、鬼藤刀祢は法律を破った者や、マフィア、反政府組織などを狩る
狩り人（ハンター）だったのだが、私の世界を救ってという少女に頼まれて――――
そして夢の中では、謎の少女と出会う。

俺はこれからどうなるのでしょうか？

プロローグ？（前書き）

『俺と紗耶香と．．．』を大幅に修正し『俺と紗耶香と世界！！』として新しく書き直しました。
あくまでベースなので。

プロローグ？

俺の名前は、鬼藤（きとう）　刀祢（とうや）。何処にでも居る普通の――少なくても俺はそう認識している――中学３年生だ。

まず、両親の話をしようか。両親は国内で有名な会社で働いていて、親父はその会社の社長だったりする。

二人とも仕事が忙しいみたいで家に帰らずに会社の一部の部屋を改装してそこで寝泊まりしていて、お小遣いは毎月会社名義で俺の口座に振り込まれている。いたって普通の家庭である。えっ、普通じゃない？

考えてみると普通じゃないような気がするけど、まっ良いか！

♪～～音楽が流れているな……ってことはもう６時半なのか。

ちなみに、ｉｐｏｄのアプリで時刻と流れる音楽を指定してロック状態にしてそばに置いおり目覚まし代わりにしている。

俺は音楽を止めて、ベッドから起きてカーテンを開けた。

カーテンを開けると、（まだ）やわらかい日射しが部屋に入ってくる。俺はそれを浴びながらうう～ん、と背伸びをした。

俺は洗面所に行き、顔を洗いってから髪を整えた。

「よしっ、今日もこれでいいだろう」俺はポツンと独り言を言う。

ＴＶを付けながら制服に着替え、エプロンをつけて台所に向う。これが俺の一日のスタートなのだ。

「さてと、作り始めますか」

ごはん（昨日の内に研いでおき炊飯器にいれセットして置いた）にあさりのの味噌汁（コンビニの）に目玉焼きにベーコン、

サラダを作りテーブルに置いていく。この生活を始めてから３年目なので慣れてきた。

料理が完成し、俺は一人で食べ始めた。正直一人で食べるのは寂し

い――その気晴らしとしてＴＶをつけてるのだが――
「やっぱり、一人で食べるのは寂しいものだな」と愚痴る。
そして、食べ終わると食器を洗い歯磨きをして学校に向かった。

俺は家から学校までの距離が近いため、いつも学校には歩いて行っている。
そして今日も同じように歩いていたんだが、空から何かが――女の子が降ってきた。
空から少女が降ってくるなんて映画や小説，漫画ぐらいでいいだろう。現実でそれを目にした俺は固まっていた。
いや、ありえなくは無いけどな。俺の通っている中学校は午後は超能力（魔法も含まれる）や武器の練習がある。特別学校なのだ。
「んっ…」どうやら気がついたようだ。
その女の子はゆっくりと目を開けて俺を見ていた。
「気がついて良かったよ。じゃ、俺学校あるから」と言い残し俺は走った。
やばい、走らないと遅刻してしまう！

「はぁ…はぁ……なんとか間に合った」と俺は息を切らしながら独り言を言い自分の机に倒れる。
「今日は珍しいね。遅刻なんて」色々あったんだよ。
「まぁな」疲れていたがそれに答えてやった。
「疲れてるんだ。寝かせてくれ」
「先生が来たら起こすね」
（ありがと、頼むぞ）と心の中で言い、俺は意識を落とした。
・・・・・・
・・・・
俺は小さい時から魔法が使えていた。それでこの学校に入ったんだが小・中・高が合わさっていて、超能力科と武装科のどちらかに所属しなければならない。

ちなみに超能力科の生徒は武器の使い方を習わされる。
なぜって？　超能力が使えなくなった時に敵に襲われたらどうする？　倒せないだろ。
ここに通っている生徒，卒業生は政府から武器の携帯を許されており、超能力科は拳銃とナイフを武装科は自分に合った物を持ち歩いている。
・・・
だれかが俺に殺気を当ててるな。俺はやれやれといった感じで目を開ける。
「刀祢君。後で職員室に来てもらおうか」なんで起こさなかったんだ。彩（さや）！！！
その顔からはしてやったりと…読める。
「ちっ！」俺は舌打ちをして彩を睨む。
「刀祢君聞いているのかね？」
「聞いていますよ。遠藤先生（教官）」
先生は俺の言葉を聞くと舌打ちをして—先生なのにどうよ—教卓に戻った。
その後はいつも通りだ。
攻撃，防御，回復魔法と武器の使い方の”初歩的な”授業だった。
特Ａクラスなのにこの授業はなんだよ。質としてはＧクラスの授業だぞと考えているうちに欠伸が出た。
ちなみに遠藤先生は気づいていなかった。俺の先生への評価は最悪だった。

つまらない授業がやっと終わり他の人は部活に励んでいる頃、俺は職員室に向かっていた。
「超能力科、中学３年特Ａ、鬼藤刀祢。遠藤先生（教官）に呼ばれたので来ました」俺は専門科目とクラスなどを言い職員室に入った。
「来たか。刀祢君」いらだっているな。

「はい」俺ははいと言って置く。
「居眠りをしていたね？その理由を「先生の教えている内容は特Ａクラスには無駄な事ですよ。あれをＧクラスに教えてやってくださいよ」」
俺は最後まで聞くのが嫌になって割り込みをする。
「貴様っ！」遠藤先生は俺に拳銃を突きつける。
「……」俺は黙ってそれを見る。
そして、先生は拳銃の安全装置（セーフティ）を外した。
「特務法違反になりますよ？」と俺は注意をするが――他の先生は顔を青ざめてただ俺と先生を見ている――遠藤先生が迷わずトリガーを引いた。
「消滅」
俺は銃弾を魔法で消滅させて右手で超能力者用の手錠を取りだして
「特務法違反で、貴様を逮捕する」と俺は態度を変えて遠藤先生に言い、
手錠をはめようと近づいた。
遠藤先生はすかさず逃げようとするが、捕縛魔法で捕まえて手錠をはめる。
俺は一度先生を睨んでから、ポケットから国から支給されいる携帯を取り出し、ある所に連絡する。
「こちら鬼藤刀祢。特別学校内で違反者を捕らえた。回収を頼む」と言って通話を終わらせた。
「遠藤先生、頑張ってね？」俺は怪しげな笑いをしながら職員室から出て外で回収班を待った。

遠藤先生が特務法違反するから帰るの遅くなったよ。
報告書を書かされたり、先生の刑を軽くするように頼んだり。

俺は家の鍵を開けようとするが、鍵が開いている事に気づき侵入者の気配を探った。
（誰か居る！）
ポケットから拳銃とナイフを持ち気配を消して音が出ないように注意をしながら気配がある所――リビングに向かった。
「貴様は誰だ？」俺は声を低く出しいつでも攻撃出来るように身構える。
俺は侵入者の顔――姿を見た途端、頭が破裂したような痛みに襲われ奇声を出しながら床をのたうち回った。
「ぐわあああああっぁぁ！！」しばらくするとその頭痛が嘘のように消えた。
俺は呼吸を整えると「さっきはすまない。それより、君を知っているような気がするんだ」と言い相手の反応をうかがう。
「……」少女はただ無言で俺を見つめていた。
「さやか？」俺は口から出た声に驚いた。俺の前世の記憶か？と思ってしまう。
「うん」と少女は笑顔で言った。
「何しに来たんだ？」
「私と一緒に世界を救ってほしい」珍しい、依頼だな。
「あぁ、いいぜ。俺の名前は鬼藤刀祢」
「ありがとう。紗耶香よ」
微かに頭痛がした。やはり魂が覚えているのか。
「所で紗耶香。どうやって中に入った？」
「ん～。魔法で開けたの」
「そうなのか。さっさと終わらせようぜ」
「えぇ。そうね」と紗耶香は言うと刀を出し”空間”を斬った。
空間に裂け目が出来て人が通れるほどの大きさになると紗耶香はその裂け目に入って行った。
俺もついて行くんだよな、とため息をついてから裂け目に入り前へと進んだ。

後ろで、裂け目が閉じるのを感じながら。

プロローグ？（後書き）

おはようございます、こんにちは、こんばんは。宮原葉月です。
本作は『俺と紗耶香と．．．』をベースとして新しく書きました。
はい。

しばらくの間、駄作にお付き合いください。

８／２２　加筆修正。

プロローグ？（前書き）

７／１９　投稿。
２０１１／０２／１２　修正。

プロローグ？

裂け目の中をほんの一歩進んだだけで、異世界に俺と紗耶香はいた。
世界移動の類かと自己分析をした。

「それにしても、嫌な世界だな」
この世界は、邪気，欲が溢れている……それに殺風景だ。
「今はね。前はきれいな世界だったよ」
むっ、大きい気配が１つあるな。
俺は気配のする方を見た。
……
……
…
うん。見なかった事にしよう。
「何をやっているの！刀祢！！」いつの間にか紗耶香は刀を握っていた。
やらないとダメ？だってドラゴンだよ？・・・・・ やらないとダメだろうな。
俺はため息をついてから、魔法で愛刀を呼びだしてそれを握った。
「うおおぉぉ！」俺は声を出しながらドラゴンを斬る。
「嘘だろっ！？」俺の愛刀ー霧夜ーで斬れないなんて。
ドラゴンの頬――在るのかは知らないけど――が膨らんでいた。
ブレスか！？俺はドラゴンから一気に離れ防御態勢を取る。
案の定、ブレスだった。炎は防げたが、暴風は防ぎきれずに後方に飛ばされる。
「ぐあぁつっっ！？」俺は岩にぶつかり、肺から空気を強制的に外に出された。

防御魔法で緩和させたが、しきれずに口から血が一筋流れそして意識を失いそうになるが、根性で堪えた。
「刀祢！？」
「っ！・・・・ 大丈夫だそれより後ろに下がっていろ」
俺は大丈夫と伝えるために片手をあげる・・・が正直つらい今ので何本か骨折ったかも。
治癒魔法で治療するがそれは応急措置にすぎない。終わったら病院行こう。
俺は痛みが幾分か治まった身体で再度、愛刀の霧夜を持ちドラゴンに近づく。
愛刀のリミッターを解除した。
刀身が輝き、光が粉のように辺りに舞う。
「霧夜。久しぶりだなそれと長い間封印しててごめん」俺は、愛刀ー霧夜ーに謝る。
「いいんですよ」と優しく主ー刀祢を慰めるように言う霧夜。
霧夜の名前の由来は、霧のように闇（夜）を切り裂く事から俺が付けた。
「ドラゴンを倒すぞ」
「分かりました」と愛刀は主に応える。
俺はドラゴンに向かって歩き出した。対してドラゴンは怯え後ずさりをする。
「俺に手を出したからには許さない！」俺はそう宣言するとドラゴンの背後に一瞬で移動する。
「うあおおぉ！！」と叫び声を出しながら霧夜を振るう。
「くぎゃ！？」ドラゴンは驚いているようだ。
攻撃範囲から離れている筈なのに、くらったのだから。
「俺の視界と察知範囲から消えろ」と殺気を込めてドラゴンに行った。
ドラゴンは無言で空を飛び、遠くに逃げて行った。
「ふぅ～」と俺は深呼吸をしてから刀を鞘にしまう。

「暫くの間放っておいて鞘にしまうなんて……」と霧夜が言ってくる。
家に帰るまで待っててよ。
「紗耶香、ここに何かあるのか？」
「今日は、力を見るだけに来たの。明日からは悪魔を倒しね」と言って空間を斬る。
俺たちは元の世界に帰った。

あの力は厄介だな、消さなければ。
俺の欲望のためにな…

異世界から戻ってきて早々に紗耶香が家から出て行った。
紗耶香の気配が完全に消えてから霧夜が光りだす…人間の姿になるのか。

「刀祢ぁ～！」甘い声で言う霧夜そして次の瞬間。
「べしゅ？！」霧夜が俺にもの凄い勢いで抱きついてきたのだ。
霧夜は女性なのだ。初めて霧夜が人間の姿になったのは驚いた。
人間の姿になるにはあまり驚かないけれど、女性だったのだ！（ここ重要！）
「独りで寂しかったんだよ？」涙目で上目遣い・・・そんな目で俺を見ないで！
「それに関してはすまないと思っている」
「ふうん。じゃ、あの女は何？」と霧夜は冷やかな目で俺を見てくる。
「任務の仲間。それ以上でもそれ以下でもないから」

「刀祢は私のものなんだから！」
「いや、どちらかと言うと俺の物では？」と言った俺だが、何を勘違いしたのか霧夜は顔を赤くさせくねくねしている。
「霧夜。今日は疲れたからシャワー浴びて寝るわ」

「なんで、此処にいるの？」俺は、秘所を隠し目線をずらして言った。
そう、浴室に行ったら裸の霧夜が居たのだ。
「一緒に入りたいから！！」と言って霧夜は俺に裸で抱きつく。もう一度言おう、裸で！！
俺はまわれ右をして出ようとするが、霧夜に阻まれる。
「だめなの？」と霧夜は涙目＋上目遣いで俺を見つめてくる。
くっ、こうなったら俺は・・・ 男は腹を括るしかない！！
「だめじゃないです！！」

その後の記憶は残っていない。

気づくと俺はベッドに寝ていた。
俺は右を見ると、幸せそうな表情をしながら霧夜が裸で眠っていた。
一体なにをしたんだよっ、俺！
「ふみゅ～」霧夜は寝惚けているのか俺に抱きつく。
む、胸が当たっているのですが！？
「霧夜？」俺は刀に強制的に戻すために霧夜の左腕を触る。
「ん、刀祢？」起こしてしまった。
「朝食作って、食べて、学校行ってくる」と俺は霧夜に言う。
「私も連れてって！！」それは、刀として？それとも・・・
「いいぜ」と一応言っておこう。
あれから数分後にやっと霧夜が解放してくれたので、台所に行った。

今日は時間が無いのでごはんとみそ汁だけ作って食べた。勿論、霧夜の分も作った。
「学校行くから。元の姿に戻って」
「なんで？」
「ほら、入学してないのがうろついてたらあれだろ？」
「そっか・・・。なら仕方がないね」と悲しそうな顔をしながら言った。
俺は霧夜の右手を握った。
霧夜は顔を赤らめた。
「人前で喋るのはダメだからな」と釘を打ち、元の姿に戻した。
俺は霧夜をおさめ、腰につけた。
俺はワープで学校に行った。

「彩、昨日はえらい事をしてくれたな。おかげで大変だったんだからな」
「いいじゃん」と彩は笑顔で言った。
俺はため息をついてから、自分の席に着いた。
昨日、遠藤捕まえたから替わりに誰が来るのだろう？
いや、懐かしい気配を感じるのは気のせいか？
ガララと扉が開く音がして女性が入ってきた。
「母さん！？」俺は人前を気にせずに大声で言ってしまった。
「刀祢。久しぶりね」と笑顔で言う母さん。
「なんで此処にいるの？」
「会社のコネかしら？」
そうですか。会社の力を使ったのですか。ご立派でなによりです。
「霧夜は？」俺は刀の状態の霧夜を見せた。
「人間にしてあげたら？」母さんは知っているのだ。
「いや、今日は・・・」
「そう、わかったわ。・・・ 皆さん席について！！刀祢も座りなさ

い」
「分かった」と言い俺は自分の席に座った。
授業の内容だが、特Ａクラスに必要な授業だったと言っておこう。
「刀祢ついてきなさい」俺は母さんに呼ばれた。
屋上に行くらしい。

屋上に出ると、俺と母さんは誰も居ないかを確認するために気配と目視で探る。
誰もいない。
「何？母さん。重要機密？」
「ええ。一斉にマフィアを狩るために招集されるわ」それはまた偉い事で。
「でも、そんなにランク高くないけど？」
「あなた、断ってるでしょ」
「はい」母さんに隠し事をしても無駄なので正直に白状する。
「あなたも来るのよ」
はぁ。やるしかないのか。
「・・母さん。何処でやるんですか？」
「アメリカだったかしら」
「全員ですね。それでどのくらいまで許されてるんですか？」
「詳しくは聞いてちょうだい」と母さんは言い帰っていった。
「霧夜」
「何？」霧夜は刀のまま言った。
「アメリカに行くぞ。二人でな」

こうして、俺はアメリカに旅行――といっても仕事なのだが――に行く事になった。

プロローグ？（後書き）

やっとプロローグが終わりました。
次回からはマフィア狩り編です。・・・多分。
では、

1話（前書き）

クオリティ低すぎですみません。

1話

俺は今アメリカの作戦司令部にいる。
「はぁ・・・・」
「おい、そこの小学生。なぜ此処にいる？」
小学生だと？
俺はその言葉に反応して刀―霧夜を抜いて首に当てる。
「俺は、鬼藤刀祢だ。小学生じゃない。それと次は無いと思え！」
「刀祢。うるさいわよ」
「ぐっ、すみません」と言いながらも俺を小学生扱いした男に殺気をあてる。
「それで、俺達は何をすればいいの？」

俺は連盟からの認定を断っているのだよ。貴様らとは違うのだ！
今、変な電波が・・・

「幹部の逮捕かしら」と母さんは首をかしげて言う。
「把握した。いくぞ部下達よ」と俺は言った。
俺はマフィアの幹部がいる部屋にワープした。
部下達もワープさせたよ。大勢をワープさせたのを驚いている。
「霧夜、頼むぞ」
「分かってます」
長年一緒に居るからこそ出来る意思疎通。
俺はいとも容易く幹部の精神を斬ってゆく。
「これで最後か」と言いながらボスであろう人物を気絶させた。
「こちら鬼藤刀祢。幹部を制圧したので後は頼みます」と全回線通話（オープンチャンネル）で言い俺は部下を置いて霧夜と共に司令部にワープした。

「母さん、終わったよ」
そう言いながら俺は、霧夜に魔力を流す。
「んぁ・・・・っ」霧夜が悩ましい声を出しながら人間の姿になる。
「刀祢、霧夜ありがと。でもまだ帰っては駄目よ。特に刀祢はね」
「何でだよ！　もう幹部も捕らえたし、終わっただろ！！」
霧夜はソファに座って微笑している。
「残念だったな。お前が断っているから強制的に連盟クラスにする事にしたのだよ。表は一人で幹部を捕らえた功績という名目で、裏は戦闘力を手に入れたいからだろう」
と狩り人（ハンター）の幹部のおっさんが言う。
「俺は国家止まりで十分だあぁぁぁ！！」と俺の叫び声が部屋に響いた。
「おじさん。刀祢をいじめないで欲しいわ」と霧夜はいつの間にかおっさんの後ろにいて首筋に刀を当てていた。
俺は冷や汗を掻きながら霧夜を呼んで落ち着かせる。
「霧夜。こっちにおいで」と言いながら両手を広げた。
「／／うんっ！！」と勢いよく俺に抱きつく。
遠くで「若いって素晴らしいな」と言っていたおっさんを魔法で気絶させ悪夢を見せた。
この部屋に居るのも同罪なので同じように気絶させて悪夢を見せる。
残っているのは、俺と霧夜に母さんの3人。監視カメラと録音機はおっさんを気絶させる前に破壊しておいたので、盗聴などの可能性は低いが念の為に防音とジャミングを掛ける。
「連盟…いや狩り人の中には隠れ堕ちがいるんだそれを退治するのが目的だろ？…母さん」とその後に不気味な笑みを浮かべる。
「わかってるのね」
「だけど、俺は断る！　なぜなら依頼があるからだ！」
「連盟には逆らえないと思うけど？」うぐっ、そう来たか。
「とにかく…」俺は霧夜を刀に戻して、母さんに刃先を向ける。

「俺は、断るっ！」
「そうなのね……仕方がない…わ！」母さんは隠し持っていた拳銃を握って、俺を撃った。
「ぐっ！」俺は直ぐに避けたが一発が肩に当たった。
俺は視界が揺らいで倒れそうになるが、瞬時に霧夜が人間の姿になって、俺を支えてくれた。
「麻酔弾かよ…最悪…だ」その言葉を最後に俺は、意識を失った。

1話（後書き）

8／15　初投稿。今日って、終戦の日でしたよね。

2話（前書き）

これから、更新できなくなるので投稿。
内容が薄い話に…

2話

俺こと鬼藤　刀祢は昨日、母さんに刀を向け、麻酔弾を撃たれ眠らされて気がつけばこの部屋にいた。
「俺も、まだまだだな…」横には霧夜が座っていた。
「そんな事ないですよ」そう言いながら俺の頭を撫でる。
そうだといいんだがな、と俺は愚痴る。
「逃げるか…」
「刀祢。そうはさせませんよ」
母さんの声が聞こえてやっと気づく。ベランダに居るという事を。
「逃げ道は無し…応じたフリをして脱走を図るしかない」
「ええ、そのとおりだわ」
「……」
霧夜はいつの間にか、俺にくっついて寝ていた。
俺が起きるまで、起きていたからだろう。
「…依頼が終わるまで出来ないから」折れた。
「刀祢なら言うと思ってたわ♪」
そうですか……。
もう、どうにでもなれ！　と思いながら霧夜にくっついて俺はまた寝た。

霧夜に勘違いをされてキスをされたのは別の話である…。

3話

皆、おはよう！　鬼藤　刀祢（きとう　とうや）だよ！
最近、寝てばっかりだよな。そろそろ帰らないと、依頼者一《紗耶香》に怒られるな。
俺は決意を決めて母さんに言う。鋭い目つきで。
「母さん、俺、日本に戻るよ」
「そう……いいわ」
「ありがとう！　…って、いいの？」俺は母さんが今、言ったことを信じられなかった。
だって、母さんだぜ？
「刀祢。失礼な事を考えないでちょうだい？」
そういえば母さんは、読心術を持ってるんだったけ。
「…じゃぁ、またね」
俺は、霧夜を抱きかかえ転移した。

数日ぶりに我が家に帰ってきた俺達はリビングで茶をすすってくつろいでいた。
「霧夜。依頼者のとこに行ってくる」
「刀祢も行くなら私も」と言って刀に戻った。
「ありがとな…」といってから霧夜を持って、刀身の部分を消した。
――とりあえず、学校に行こう。
時間を見ると徒歩では間に合わないので、瞬間移動（ワープ）を使った。

よし、座標ピッタリだな――自分のクラスの下駄箱の前にいるのだ。
クラスに入ると……居た。依頼主（紗耶香）に近づいて挨拶をする。
「久しぶりだな」

「そうね。逃げたと思ってたけど…仕事だったのね」
「ああ。すまない。…深夜で良いか？」
「ええ」と了承は得た。

自分の机に座って、霧夜の柄の部分を左手に持ったまま寝た。
――そろそろ、時間だな。
俺は、静かに目を開けて周りの気配を読む。
母さんでは無いな。――母さんは、家に居る時しか気配を出してないから。

――授業中に、世界の不穏な動きを察知して俺は、身体を震わせた。

3話（後書き）

毎回、短くてすみません。

受験合格までこんな感じだと思います…。

合格したら『話』が長くなります。多分。

登場人物等（前書き）

混乱するので登場人物等を連載します。

番外編ということで。

登場人物等

【登場人物】

鬼藤（きとう）　刀祢（とうや）

本作の主人公。国家認定の狩り人（ハンター）であり、最高の技術を誇る。
国家クラス以下のハンターを監視して、特務法を違反した者を捕まえたりしている。
世界連盟の認定授与の話を拒否しているが、たまにそれを持ち込まれる度に逃走している。
本人が言うには（連盟クラスは忙しくて休みが無くなるのは嫌だから）との事。
性格は、普通（本人はそう思っている）で、自分を威張らない。一人称は『俺』
武装は魔法と刀ー霧夜ーがメインで、場所や状況にとってサブ武装を変える。

??　紗耶香（??　さやか）

本作のヒロイン。主人公の前世から関わっていると思われる。家名は不明。
世界を救ってほしいと主人公にお願いをする。その世界とは異世界らしい。

霧夜（きりや）

倉庫で探し物をしていた所、発見して刀祢の刀。女性の人格と感情があり、人間の姿になる事も出来る。
外では真面目で冷静な感じだが、刀祢の前だと甘（デレデレ）えんぼうになる。

【用語？】

■狩り人（ハンター）

武器の所持を認められている者のこと。
一応ランクがある。
ハンターは特務法を守らなければならない。
法律を破った者や、マフィア、反政府組織などを取り締まるのが義務である。
ちなみに、ランクは、上から
世界連盟
国家
都道府県
地方
である。

■組織

狩り人（ハンター）の多くは組織に入っている。
有力な組織は
・清浄な世界―（政府，連盟公認）
・混沌―（反政府，連盟）

■特務法

特別学校に通っている又は通っていた生徒、狩り人（ハンター）に適用される法律。

・生徒，教師に武器を向けてはならない。（演習，上位は例外）
・なるべく殺さない。
・己を過信しない。
・仲間を信じ、助け合わなければならない。

などがある。

4話（前書き）

遅くなってすみませんです……。

4話

先生が替わったせいか、授業内容が良くなった。――そういえば、あの先生どうしてるかなあ。
牢屋(ろうや)に居るという事には変わりないだろうけどね…。

さてと、必修授業は受けたし帰りますか。――前言撤回(ぜんごんてっかい)。……依頼をしよう。
俺が帰ろうとした時に、凄まじい殺気を俺に当てている人物が居た。
紗耶香だ。
――ここ特別学校だよな。なのに、他の人は殺気に気付いていないなんておかしいよな。
「今日は来るわよね？」と紗耶香が耳打ちしてくる。
「行くよ。依頼だしな」それに、”懐かしい感じ”がしたからな、と心の中で付け足した。
その言葉を聞いた紗耶香が、どこか嬉しそうな顔をする。
家に来いよ、と俺は紗耶香に言って学校から出た。

家に帰ると、既に紗耶香が家の中に入っていた。家の中に入ったのは、魔法で鍵を開けたのだろう。
紗耶香が不機嫌そうな顔をして、遅かったわねと言いながら斬られそうになった。――まあ、避けたが。
「行くわよ」と言いながら、虚空から刀を出して、空間を斬って次元の裂け目に進む。俺もその後についていく。
――――霧夜を右手で持って。

後ろから”人間では無い”殺気を認識した瞬間に、俺は跳んで空

中で体勢を整えて、戦闘態勢に入った。
「人間にしてはやるね♪」人語を話すそれは、背中には漆黒の翼…まさしく悪魔だった。
「紗耶香。なぜこの世界に悪魔が居る？」俺は虚空から身体を守るコートを出してそれを着た。
「僕が、支配してるんだよ！」子供みたいな口調で嘲笑う悪魔。
「審判（しんぱん）してやるよ。…お前の罪をな！」と俺は宣言して、力の抑制（リミッター）を全て解除する。
眼は金色。髪は紅蓮。翼は純白。
「刀祢！　その髪と眼の色はっ？　それに背中の翼も！」
「力の抑制（リミッター）解除の影響だ。心配ない」
「面白いね、その力！　僕に見せてよ」
さすが、悪魔。自分の欲望ばかりに。俺は悪魔を見つめたまま霧夜（きりや）の刀身を人差し指と中指を添えて先へとなぞる。
刀身から焔のように舞う光がでてきて、辺りを舞う。
「どのぐらいなのっ！？」
「お前の罪を教えて…くれっ！」一気に間を詰めて一閃する。が掠…ただけ。
刀が掠った部分だけ、光に”変わる”。
悪魔は苦悶の表情を浮かべながらも、俺を睨んでいる。
「よくもおおお、やったなあ！　人間よ！」目の前にいたのに、居なくなっていた。
気配で何処に居るのかを探った。――後ろだ！
それと同時に”攻撃の気配”がしたので、後ろを向きながら刀を両手で持って前に出す。
黒いものが刀に当たりながら霧散していく。
「『審判の焔（ジャッジメントフレイム）』――はああっ！」刀から焔を出して、一閃して悪魔にへと放つ。
審判の焔（ジャッジメントフレイム）は人間にはきつい技だ。なんたって身体を包みこんで燃やすからな。

俺は唖然(あぜん)した。――悪魔は、それを片手で防いでみせたからだ。
「くっ、ならば……。『拘束(レジスト)の呪縛』」悪魔に拘束魔法を掛けた。
少しは時間稼ぎになることを信じて。
「なんだあ。つまんない」と悪魔は言うと『拘束(レジスト)の呪縛』を力で無理やり解くと、消えた。
――まるで、玩具(おもちゃ)に興味を無くした子供のように。

悪魔が居なくなって、気が抜けた俺は意識を失った。

「もっと、僕を愉しませてよ」と嗤(わら)いながら悪魔は言うのだった。

4話（後書き）

受験モードＯＮの宮原葉月です。
最近、グッと寒くなってきましたね。通学にはコートが欠かせません！

さて、今回は『悪魔と戦闘』がメインでしたがどうでしたでしょうか？

番外編―俺と霧夜の出会い（前書き）

本編とはあまり関係ありません。

番外編―俺と霧夜の出会い

この物語（ストーリー）は、俺と霧夜が初めて出会い，狩り人（ハンター）になりたての頃の話である。

俺は部屋の物置で探し物をしていた。その頃の俺は、見習い狩り人（ハンター）だった。
物置に武器は無いかと思い探しているのだ。両親は昔、狩り人だった。
ならば、物置に武器の一つや二つぐらいはあるだろうと思い探し始めた。
４０分ぐらいだろうか、武器の気配が感じられるようになった。
どこか懐かしい気配だった。急いで俺は気配がある方を探し、ついに見つけたのだ。

それは刀だった。俺は迷わずそれを握った。
その刀が俺の魔力を吸収している。少しづつ吸収されていてイライラして来た俺は刀に大量の魔力を送った。
刀から煙―おそらく、俺の魔力―が出てきた。
次の瞬間、ボワン！　という音を立てながら一人の女性が座っていた。全裸で。
「ふう、やっとこの姿になれた。……貴方が私の主？」
俺は固まっていた。なぜかって？
分からないだろうか、女性が全裸で目の前に立っているんだぞっ！
目のやり場にも困るし……。
「貴方が私の主？」
ああ、もう！
俺は彼女を見て、頷く。

「よろしく、主」と彼女は言い残すと、刀に戻った。

――これが、俺と霧夜の出会いである。

番外編―俺と霧夜の出会い（後書き）

２０１１年もよろしくおねがいします。

5話

俺は、気付くと深層世界に居た。
俺が創り上げた世界だというのに、人が立っていた。
「力を欲しますか？」顔を下に俯いたまま俺に問いかける。
そんなものなんか決まっている。
「ああ」
「何のために？」
「俺は……。守りたいんだ。仲間を。平和とか日常をな」
人――”少女”は、微笑みながら俺を見てから俺の身体に触れた。
「じゃあ、あげるね」
触れた途端、少女がいなくなった。
そこで、俺の意識は落ちた。

俺の身体を揺さぶってるのは、誰だろうか。
「――きてっ！」断続的で聞き取れないや。
俺は重たいまぶたを開ける事に成功した。――心配そうな表情をして俺を見つめている紗耶香。
「そうか。負けてしまったのか」
それにしても……。深層世界で力を貰った気がするような。
「それでも。刀祢が生きていてよかった」と紗耶香が安堵の息をついた。
俺は立ち上がり、仕事を再開しようとするが止められる。
「今日はおしまいでいいわ」と言って消えた。
完全に紗耶香の気配が消えた後に、地面に寝転んだ。
「あはは。帰れないわ」乾いた笑い声に響いた。

「刀祢、大丈夫……じゃないね」俺の愛刀である霧夜(きりや)が人間の姿になって、治癒(ちゆ)魔法を掛けてくれた。
「ありがとう」俺は立ち上がろうとするが、よろめく。
「もう、仕方がないんだから」と言いながら霧夜は俺の事を抱えて元の世界に帰ろうとする。
「すまない。それにしてもこうやられるのは久しぶりだなあ」その後に俺は力なく笑った。
「そうね。身体に負担かかっちゃったらごめんね」

俺の身体を労(いた)わってくれているのかゆっくりと次元路(じげんろ)を歩いてくれている。
身体が限界に達(たっ)したのかは分からないが、俺の意識はそこで途切(とぎ)れた。

おしらせ

３月１１日に三陸沖で発生した観測史上最高　Ｍ９．０の地震により、とても執筆できる状況じゃありませんでした。
そのため今月予定していた、以下の作品を来月に延期します。
・神様のお願い
・僕と幼馴染みと…～僕は女の子じゃない！～
・俺と紗耶香と世界！！

なお、地震前に投稿した「僕の現実逃避」と「異世界にｄｉｖｅ！！」の来月分はお休みします。

楽しみにしていた方には申し訳ありませんが、よろしくお願いします。

字稼ぎ。
あ

6話

気が付けば俺は、草の上で寝ていた。空は雲一つなく青く澄(す)んでいた。
ゆっくりと起きあがる。俺の寝ていたところは草原で間違いないようだ。
でも、どうして俺はこんなところに居るのだろうか？
「お兄ちゃん、起きたんだ？」声が聞こえた。
その方向を見ると、あの時の少女が居た。だとしたら此処(ここ)は俺の夢の中なのか？
「違うよ。――でも、それに近いかな？」
この少女には隠し事は出来ないようだ。
「君は誰なんだ？」
「私？　まだ秘密よ。お兄ちゃん」
空間がぼやけ、ズレてきている。
「……夢の終わりか」
「またね。お兄ちゃん」と少女は笑って手を振っていた。

夢から覚めた俺は、辺りを調べる――なんてことはしないで自分のベッドで寝ていた。
「おはよう。刀祢」霧夜(きりや)が微笑みながら俺を見つめていた。
「ああ、おはよう。ところで今、何時なんだ？」
「7時よ。学校には、休むって伝えておいたからゆっくり休んでね」
ありがとう、霧夜。でもな休むわけにはいかないんだよ。
俺はベッドから降りて着替えを始める。霧夜が俺を抑えようとしていたので名前を呼んで制した。
「霧夜、刀に戻ってくれ」霧夜は一瞬、悲しい表情を浮かべてから刀に戻った。

霧夜を異空間にしまって俺は意識を切り替えた。

最近、紗耶香の任務しかやっていなかったから他の任務がたまっていたので任務を消化するべく組織に顔をだした。
任務が多すぎたので他の狩り人（ハンター）に回した。ちなみに俺が引き受けた任務はS級犯罪者の確保だ。
「お前が国家の狗か」そう、この人こそがS級犯罪者だ。
「そうだが？」と言って霧夜を出す。
「刀祢は無茶しすぎっ、分かってるの！？」案の定、霧夜に怒られるがそれは後だ。
「喋る刀か。――それは俺が貰ってあげようじゃないか！」
「だれがやるか。霧夜は俺のモノだよ」
「そうですっ！　私に触れていいのは刀祢だけです」
「なら力づくでやるしかないなっ！」そう言うと、右手を俺の方に向けて光の矢を放った。
俺は霧夜で斬って矢を霧散させる。
霧夜を人間に変化させて、俺は武器を魔法に絞った。
「その刀は人間にもなれるのかっ！」
「霧夜は誰にも渡さない」その言葉と共に、氷結魔法を使って足元を凍らせて動けなくして背後から手刀を放って気絶させる。
ポケットから能力妨害機能の付いた手錠を出してはめさせて、携帯を取り出して本部に連絡をする。
「犯罪者を確保した。回収頼む」砂埃が舞って視界が隠される。
視界が回復した頃には刀祢の姿が無かった。

7話

ふにゅ、といった男の子なら嬉しい柔らかい感触が俺の右腕に感じる。
見てみると、いつ裸になったか分からない霧夜(きりや)が抱きついていた。
「気持ちいい？」
「霧夜。頼むから服を着てきてやってくれ……」
「仕方がないな」と残念そうな表情をしながら服を着る。――といっても下着だが。
これでいいか、と霧夜が聞いてきた。
「ああ。どうせダメって言ったら脱ぐんだろう？」
「私の事をよく知ってるわね。ご褒美をあげちゃうぞっ！」と言って俺にキスをしてきた。
慣れているつもりなんだが、なぜか恥ずかしいんだよな。
「刀弥(とうや)。今日は安静にしてなきゃだめだからね」
不安そうに瞳を揺らして俺を見つめていた。そんな顔をしていると断れないだろう……。
「霧夜も休んでくれよ。俺はお前が居ないと何もできないに等しいからな」
実際、霧夜には六割ぐらいは頼っている。――今、俺なんて言った？
傍から見れば愛の告白と勘違いされそうな言葉を言ったような。
「――ううん。私は何もしてないよ。全部、刀祢の力だよ」
霧夜は突然、俺を抱いた。――前だから胸が当たってる。
柔らかくて、甘い匂いがする。
「ちょっと、霧夜っ？」
「あんっ。……刀祢の息が当たってる」と言って霧夜がもぞもぞ動く。
やばい、頭が真っ白になってきた。

霧夜に謝って俺は刀に戻した。しばらくの間、霧夜は自力で人間の姿にはなれないだろう。それにしても、
「やばかった」
「刀弥、ひどいよ」と霧夜が悲しそうな声で何か言っているが、俺には何も聞こえない。
俺は霧夜を持って刀身の部分を指でなぞる。金属特有の冷たさを指に感じる。
霧夜はああ言っていたが、いくら仕事だからって学校行かないとかまずいだろう。
しばらく着ていなくて埃をこぶった制服をそよ風程度の弱さに抑えた魔法を放って埃をほろう。
よし、行きますか。

7話（後書き）

４か月も更新せずにすみません。。

8話

久々に通る通学路は新鮮に感じた。
「おっ！　不良少年発見！」と遠くの方から友人の声が聞こえた。
「おい、俺は不良ではないからな。あくまで俺は”任務”で休んでいたんだからな」
「それより知っているか。今日テストなんだぜ？」
「テストと言っても実技の方だろ？　大丈夫だと思うぜ」
「ああ、お前なら大丈夫だろうな」
「……テスト受けさせて貰えないからな」
そうなぜか俺はテストを受けさせて貰っていない。特別措置（そち）が取られているようだ。
「それにしてもこんなにゆっくり行って間に合うのか？」
「まだこんな時間……って、もうやばいじゃん！」
そしてあっという間にその場からいなくなった。――あれ、あいつ魔法使えたっけ？
俺は校長室でくつろいでますかね。

校長室まで空間転移（ワープ）した。
「おや、来るのが早いんじゃないか」
じじいがこの時間に来させたんだろ。まぁ、声には出さないが。
「今日は偶々（たまたま）ですよ。校長」
「それならいいんだがな。――霧夜（きりや）ちゃんはどうしたんだ？」
「家に居ますよ。あいつだって休息が必要なんですよ」
校長は顔をゆがませた。
「家に帰ったら怒られるんじゃないのか」
「そうでしょうね……」
「君が優秀な国家クラス狩り人（ハンター）でも女には弱いんだね」

愉快そうに笑っているのをみた俺は、
「いくら校長でも容赦(ようしゃ)しませんよ？」
「それが若者の良さなのだよ。分かるかね、刀祢君」
俺は異空間に入れておいた刀を左手に持つ。
「ほう。私と戦(やりたい)いのかね」
「さすがこの学校の理事長でもあり校長。ここの学生では敵いませんよ」
持っただけで気付きあがった。
「ほう。それは君が言うことかね？」
「あの時は校長が手加減してくれたお蔭ですよ」
スピーカーからチャイムが鳴った。
「これで失礼します」
俺は扉を開けて校長室から出た。

9話（前書き）

お待たせしました！！
よいお年をお迎えください。

9話

清く澄んだ青空と爽やかな風を感じられる屋上に俺は来たが、先客がいるみたいだ。
「貴方も来たのね」風のように透き通る声がした。
「うっ、お久しぶりです先輩」
「あら、あからさまな嫌がり方なのね。――刀祢(とうや)くんはそんなに私の事が嫌いなの？」
「苦手ってだけですよ。第一その原因を作ったのは朱梨(あかり)先輩じゃないですか……」
「あらそうだったかしら？」
「忘れたとは言わせませんよ。――貴女と組んだ時の事を」
数年前、俺は朱梨先輩と組んだ事があった。その時の潜入時に朱梨先輩が俺に女装をするように強要してきたのだ。
「ええ、勿論覚えているわよ。でもあれじゃ仕方がなかったでしょ？」
「くっ……。でもだからって女装をしなくても良かったはずです」
「半分以上は私欲かしら。またやる？」朱梨先輩は魅了するような微笑みを浮かべた。
「いえ、遠慮しておきます。それに昔の俺とは違いますから」
俺は、右手に火焔球(ファイヤーボール)を出現させて投げた。
そして火焔球は朱梨先輩にぶつかって爆発した。
「刀祢くんの焔は暖かくて優しいのね。もしかして火力制御(コントロール)しちゃった？」
「煩いですよ、朱梨先輩」虚空から短刀――紫雨(しぐれ)を出し、切っ先を先輩に向けて放った。
「……さすが、ね。でもそれだと私は倒せないわ」先輩は片手だけを俺に向けていて気付けば俺は吹き飛ばされていた。

やっぱり紫雨だけじゃダメか。こんなことならしなきゃよかった。
「動きが悪くなったわね。前より少し弱くなったんじゃない？」
「たしかにそうかもしれないな」実際にこの数年で俺は弱くなった。
「私と一緒に来なさい」なんの脈拍もなく朱梨先輩はそう持ち出した。
「俺がですか？　無理ですよ今の俺じゃ役に立ちませんから」
「ふふ。今の貴方だからこそよ」いつの間に俺の後ろに来たのだろうか。気づけば後ろから抱きしめられていた。
抱きしめられるということは当然密着してるわけで、朱梨先輩の膨らんでいて柔らかいものが背中に当たっていることを感じる。
「朱梨先輩っ！」
「何のことかしら？」この、確信犯め……。
「分かりましたよ、組めばいいんでしょ！　ていうか離れてください」
「むっ……。まあいいわ」数秒悩んで俺を離してくれた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3107m/

俺と紗耶香と世界！！

2011年12月31日16時56分発行